

統合失調症における日本一を目指す専門病院



病院敷地内には、病棟やリハビリテーションセンターに面して、よく手入れの行き届いた中庭や広場がある。季節の花や緑にあふれ、明るく穏やかな雰囲気は、この病院の居心地の良さを感じさせてくれる。

院長就任時の3つの目標

「統合失調症における日本一の専門病院を目指す」——このスローガンのもと次々と新しい取り組みを行っている医療法人社団欣助会 吉祥寺病院（塚本 一院長・345床）は、東京西郊に延びるJR中央線三鷹駅と京王線調布駅のほぼ中間に位置しており、昭和29年（1954）の開設時の面影がまったくない閑静な住宅街にある。病院名は「吉祥寺病院」だが、所在地は吉祥寺のある東京都武蔵野市ではなく調布市である。

開院当初から精神科専門病院として、特に統合失調症患者の早期退院と社会復帰を目指す医療を展開してきた。今日でこそ統合失調症患者を対象とした長期入院患者の退院促進は当たり前に行われているが、1950年代半ばは統合失調症患者の「隔離・収容」が主流であった。その時代からこの方針を打ち出していたというのは、塚本院長の父、塚本金助初代院

長の慧眼といえよう。

また開院以来、統合失調症患者を中心とした医療を展開し、1室に最大4床の病室を草創期から実現させ、作業療法は昭和39年（1964）から、患者家族会の結成は昭和40年（1965）から、プログラムを自分たちで決める実行委員会方式のデイケアは平成3年（1991）からというように、その時々における斬新な試みに早くから取り組んできた。

こうしたことから同院は、精神科専門病院の先駆的な病院として注目される存在であったが、この間、一貫して患者とその家族の側に立った医療に力を注いできた。その姿勢は今も変わっていない。このことは同院の「患者様やご家族の側に立った医療、患者様の社会復帰を目指す医療、全職員相互の力を発揮できる医療」を掲げる基本理念にしっかりと謳われている。実際これに沿った内容の医療サービスの提供は、地域の患者や医療機関から評価を得てきた。

平成11年（1999）に院長に就任した塚本 一院長は、5年ぐらいを目途に達成しようと、①常勤医師

東京都・医療法人社団欣助会 吉祥寺病院

〒182-0011 東京都調布市深大寺北町 4-17-1

<http://www.kichijoji-hospital.com>



の増強による医局の強化 ②病棟改築によるハード面の強化 ③医療の質の向上を図るソフト面の強化という3つの目標を掲げた。

現在、就任当時に5人だった常勤医師は13人になり、医局の強化という点は成功をみており、他の看護師（NS）、精神保健福祉士（PSW）、作業療法士（OT）といった医療スタッフも増え、マンパワーの面においては初期の目標を達成している。

また、新病棟が完成したのは平成16年（2004）のことだ。住宅街にあって一際目立つ建物でありながら、周囲の雰囲気十分に溶け込んだ瀟洒な造りになっている。そのため、病院の敷地入口に「吉祥寺病院」の表示看板はあるが、道路から敷地に入り玄関までのエントランス、ロビーと続くアプローチゾーンは、ごく自然な心持ちで出入りできるという印象だ。院内も病室、デイルームなど明るく、患者のみならず、スタッフが働きやすいように配慮された設計になっている。美しい植栽で彩られた中庭や大きな桜の木々に囲まれた芝生に覆われた集団での運動が可能な広い庭も、運動療法やリハビリ空間として機能するにはうってつけだ。取材当日の夏の日の昼下がり、近く同院で行われる盆踊り大会の練習が行われていた。

3番目の目標である医療の質の向上を図るソフト

面の強化という点に関しては、「当初、第三者機関による評価と意義の必要性についてなかなか職員に理解されなかった」（塚本院長）。しかし、1年間の準備期間を設け、その間に多職種の代表で組織した病院機能評価点検委員会でまとめた評価基準と当院の現状の比較レポートに基づき、平成13年（2001）に病院機能評価を受審。その後すでに2回の更新を果たしている。

経営目標に向けての様々な施策

塚本院長は、院長就任時の目標が実現したため、次の目標として、病院の診療機能をこれまで力を入れてきた統合失調症に特化することに決めた。そのゴールとしての目標は「統合失調症に日本一強い病院にする」ということだった。

これと並行して、塚本院長は経営の強化を目標に掲げた。現状における同院の実績（平成24年度）は、年間の入院患者数はこの10年で約3倍近い745人にのぼり、外来患者数は120人を超えた。一方、99%近かった年間病床利用率はこの10年間は漸減傾向にあり、現在は約93%になった。特筆すべきは平均在院日数の低減と高くなった回転率だ。10年前には400日近くまでであった平均在院日数は



玄関を入ると受付ブースがある。右奥に進むと外来へ、左は病棟へ続く。



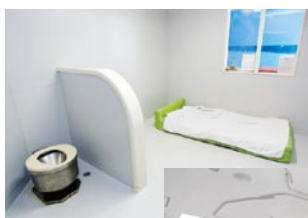
外来受付と待合 診察室は6室



地域生活支援室



忙しく生き生きと働く
病棟スタッフと
スタッフステーション



5室ある保護室も
清潔で明るい



4床室

どのベッドにも窓
がある造りで、壁
で仕切ると個室に
なる。



職種を越えたミーティングや勉強会が活発に開かれ、ハイレベルのチーム医療が患者の社会復帰を支えている。



「やりがいプロジェクト」
職員対象の「楽しいお弁当」イベント（2012年）

160日まで下げる大幅減。回転率は90%から230%近くに上昇した。ちなみに、同院は主に区部西と調布、三鷹の各市を診療圏としているが、この地域以外からの患者も少なくない。

おしなべて、この10年の間に経営改善が図れたことがうかがえる数値をはじき出しているといえる。しかし、「安定した病院経営」の指標としての病床利用率は経営目標（98%）に及ばず、同院が打ち出す「専門性の高さ」実現の目標である新規入院患者における統合失調症患者の割合80%に対して65%、「治療を行う病院」として受け入れる年間の入院患者数も745人で目標（800人）到達まであと一歩というところだ。だが、そもそも目標数値が高い上に、診療圏および周辺精神科医療の地域事情をみれば大いに健闘している数値であり、地域医療

機関との連携が進んだ結果の紹介入院の増加（平成24年度実績は59%）などを見てとれば、今後さらに目標数値に近づいていくことが予想できる。

同院の場合、あくまでも「統合失調症における日本一の病院」を作り上げていくことがミッションである。同院が外に向けて、患者やその家族にとって協力、信頼しあえるパートナーになり、さらに全ての医療機関にとっての大切な患者を紹介したくなる統合失調症のプロフェッショナル集団として「高い専門性」を備え、「急性期から社会復帰」まで幅広く患者の治療を行う病院として機能していくことに腐心し、さまざまな施策を講じているのはそのためだ。

同院では、とりわけ力を入れている患者の社会復帰を目指す医療の確か度でスムーズな推進のために、塚本院長以下、副院長、地域生活支援部長、看護部



病棟でのリハビリ



クリスマスパーティ



職員も一緒に楽しめる広場での運動会



リハビリテーションセンターの前にあるみごとな桜

長、師長、相談室長、地域移行推進室長、在宅支援室長、訪問看護主任、デイケア・ナイトケア主任、作業療法科長、外来師長がメンバーに名を連ね、それぞれの方向性を確認し、情報共有し、これに関連するさまざまな施策を統括する社会復帰委員会が機能している点も特徴だ。

一方、家族支援を主眼とした、病院スタッフによる講義やディスカッションを行う「家族会（やすらぎ会）」（毎月1回）、医師、薬剤師、精神保健福祉士による統合失調症や薬、施設、公的相談などについて講義する「家族教室」（1、5、9月に実施）、家族の心のケアを目的に行われる心理教育の講義とグループワークによる「ファミリーサポートセミナー」（年12回）などが行われている。

専門性を高らかに宣言すれば、それに伴う骨太で

しかも繊細な施策を日々講じていかなければならない。経営における収支のバランスも崩してはいけない。「病院は患者にとってもスタッフにとっても、さらに地域にとっても良い雰囲気が必要なんです」と語る塚本院長の笑顔は人柄を物語るように穏やかで明るかったが、「統合失調症における日本一の病院」になる決意が垣間見えたことも確かだ。今後、同院の統合失調症専門特化が地域における精神科医療の機能分化のモデルケースになることを期待したい。



塚本 一理事長・院長